

フィールド
レポーターだより!!



2008年度 第1回調査

「みちしるべ」調査報告

今回の「みちしるべ」調査では、259基の「みちしるべ」を調査しました。調査項目は、地図作成ソフトや、エクセルにデジタル入力をした後、様々なグラフや地図を作成し、それをもとに「みちしるべ」の特徴を分析しています。

「みちしるべ」を調査した資料としては、『近江の道標』(木村至宏著、民俗文化研究会、1971年)や、『中近世古道調査報告書』(滋賀県教育委員会)などがあります。特に『近江の道標』は滋賀県内の「みちしるべ」を広範囲に調査した初めての調査であり、「みちしるべ」の形態の分類もしています。ここでの分類基準は『中近世古道調査報告書』で引用しているだけでなく今回の「みちしるべ」調査でも参考にしています。

では、今回の「みちしるべ」調査報告と、この二つの資料との違いはと言いますと、『近江の道標』では、「みちしるべ」の発生から、近江の街道、形態分類などの「みちしるべ」についての大まかな記述がありますが、今回の「みちしるべ」調査報告のように具体的な数値を示した表現はあまりしていません。また、『中近世古道調査報告書』では、「みちしるべ」でも常夜灯型に主眼をおき、実測図を作成したり、江戸時代の絵図に描かれた「みちしるべ」の立地を分析したり、『近江の道標』とは異なる視点からの資料の提示はありますが、今回の「みちしるべ」調査のように、現代の石工への取材による「みちしるべ」の製作工程についての記述や、「みちしるべ」の現状や今後の保存・活用への視点からの記述はあまりありません。今回の「みちしるべ」調査報告によって、現在の滋賀県の「みちしるべ」の有り様が、多視点から報告されたことで、より具体的に見えてきたのではないのでしょうか。

最後に、このレポートを初めて読ませていただいた時、調査や調査票の整理時の楽しさだけでなく、それらにかけた手間の大きさも伝わってきました。調査に参加されたフィールドレポーターやフィールドレポータースタッフの皆様、フィールドレポーター担当学芸員の皆様のご努力に敬服いたします。この「みちしるべ」調査には、継続調査や、調査参加者との交流という希望もあるようです。今後も、「みちしるべ」について、活発な議論が深まればと思います。

琵琶湖博物館学芸員 老 文子

「みちしるべ」調査報告

フィールドレポーター・スタッフ 浅井良英

日本における東西の交通の要衝である近江には多くの主要街道が発達し、それらの街道の要所には「みちしるべ」が設置されて、交通標識として利用されてきました。しかし交通手段や旅行事情の変遷により、当時の「みちしるべ」はその役割を終えつつあります。この「みちしるべ」を記録するとともに、「みちしるべ」を通して人々の旅と生活について考えてみることに、また近年、増えつつある現代版「みちしるべ」も取りあげて考えることを目的に、今回の調査を実施しました。ここにそのまとめを報告します。

本報告の構成：

<input type="checkbox"/>	調査票のまとめ： 調査項目 1) ~ 8)	3
	-1 調査概要	3
	-2 調査項目の統計数値	3
<input type="checkbox"/>	調査結果から「みちしるべ」を考える	9
	-1 文化財としての「みちしるべ」	9
	-2 交通資料としての「みちしるべ」	10
	-3 生活資料としての「みちしるべ」	14
	-4 文字資料としての「みちしるべ」	17
	-5 今後の展望	20
<input type="checkbox"/>	「みちしるべ」に対する考えなど： 調査項目 9) ~ 12)	22
<input type="checkbox"/>	別冊 調査資料	
	(1) 「みちしるべ」に刻されていること(内容)	別 1
	(2) 「みちしるべ」の設置場所(地図)	別 9
	(3) 「みちしるべ」調査票	別 16
	(4) 変体仮名一覧	別 18
	(5) 「みちしるべ」の調査者	別 18

「みちしるべ」に名前を、設置場所を基準にして、以下のルールで名称をつけました。

名称ルール： A・B・C・D(他と識別できる階層まで)

ここで、A 設置市町村名、B 通称名、地域、C 大字・通り、D 記号・行き先

例：「近江八幡・小幡」、「大津・三井寺・大門」、「大津・小野・1」など

今回の調査に参加された方の多くが、『近江の道標』(木村至宏著、民俗文化研究会、1971年)、『近江の道標』(木村至宏・著、寿福滋・写真、京都新聞社、2000年)を参考にされていました。以下の文中においても、これらを引用する場合には、『民俗文化版』、『京都新聞版』と呼ぶことにします。

□ 調査票のまとめ： 調査項目 1) ~ 8)

- 1 調査概要

調査期間： 2008年5月中旬から8月末まで

調査報告件数： 330件

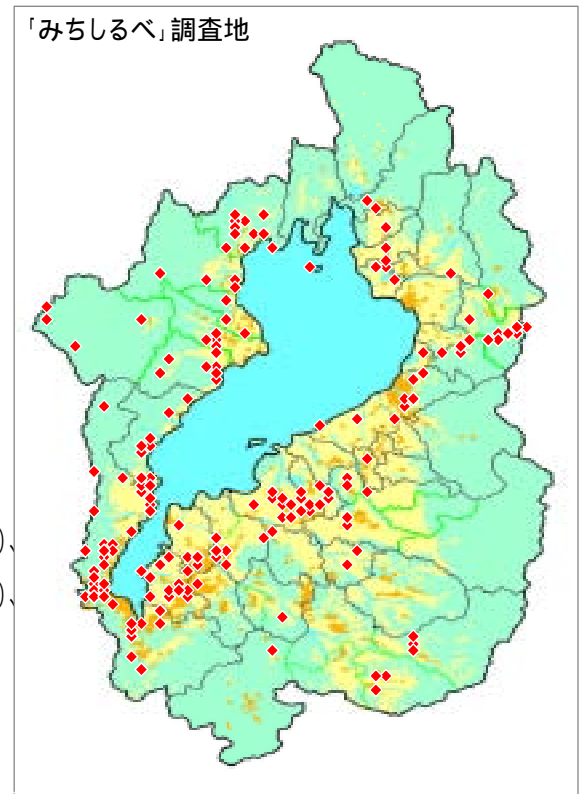
調査「みちしるべ」件数： 259基

同一「みちしるべ」に対して複数の調査報告が有る場合は「みちしるべ」件数としては1件とする。

調査報告者数： 26人

調査地域(右図参照、市町村は順不同)：

大津市(79)、守山市(8)、長浜市(6)、
竜王町(2)、安土町(11)、栗東市(3)、愛荘町(1)、
高月町(2)、甲賀市(6)、米原市(23)、湖北町(3)、
高島市(44)、湖南市(1)、彦根市(15)、
木ノ本町(2)、八日市市(3)、近江八幡市(21)、
東近江市(5)、野洲市(13)、草津市(11)



- 2 調査項目の統計数値

調査項目の説明不足のため、一部の回答に混乱がありました。言葉の定義を以下のように整理し、調査票をデータベース化(DB)しました。

(1) 「みちしるべ」としては、少なくとも「方向指示語・記号」、「距離・里程」が刻されているものを対象としました。また、一里塚(あるいは一里塚跡やその代替の植樹)は「みちしるべ」に含めました。一方、旧跡や土地案内標識(「蓮如上人御旧跡」、「中山道柏原宿」などだけの情報)はDBへは登録していますが、「みちしるべ」の集計の対象からはずしました。

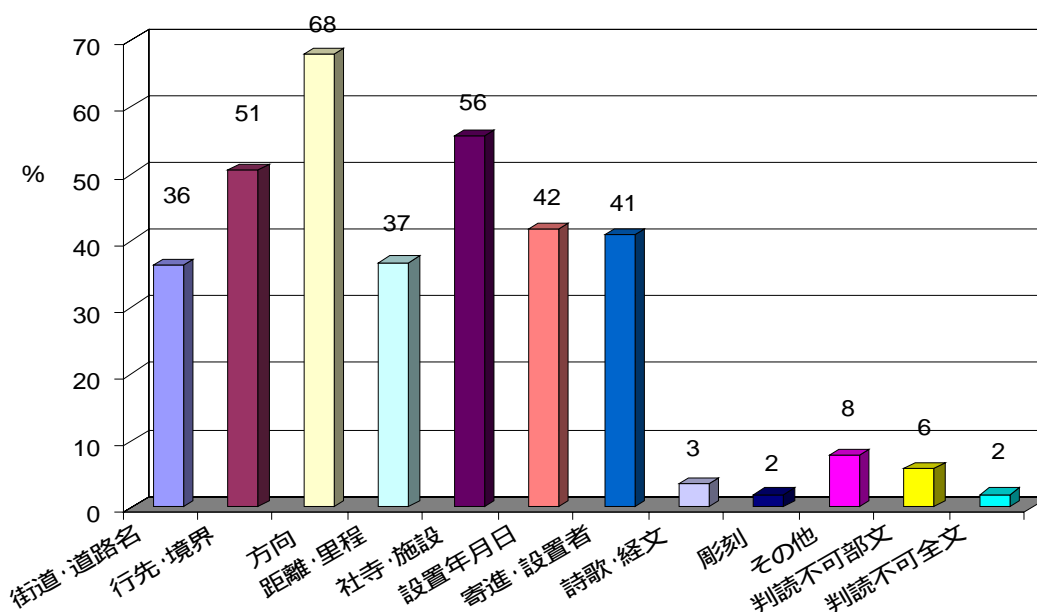
(2) 調査項目3)について整理しました(本来は、これらを事前に検討しておくべきでありました)。

- ・ 街道・道路： 明確に街道や道路を指示すると考えられるもの。例：東海道、北国海道、荒神道、藤樹神社参道、志由ん礼道(じゅんれいみち)など。
- ・ 行き先・境界： 地名があるもの。例：大津、木ノ本、京など。なお「もりやま道」などは“もりやま方面”という意味と解釈できるので、行き先(もりやま)に分類。また境界には従是東膳所領、滋賀・岐阜県境などが含まれます。ただ、現在地名を刻したものがありますが、今回の調査では行先名と現在地を区別していないで、地名として分類していることにご留意ください。
- ・ 社寺・施設名： 行き先のうちで、特に社寺が刻されているもの。また「長命寺道」や「かんおんじ道」も、各々“長命寺”、“かんおんじ”と考え、社寺に分類しました(「行き先」、「街道・道路」などには分類しない)。
- ・ 方向指示語・記号： 右、左、うしろ、すく(「直」であり、直進の意味)、東・西・南・北、さらに指や矢印による方向指示が入っているもの。

【結果】 調査地域に偏りがあるため、統計数値からは、結論めいたことは言えないので、以下にはアラカルト的な紹介をします。街道・道路名では中山道、東海道、北國街道、北國海道 藤樹神社参道など。行き先では近江の各地の地名が大半ですが、京、美濃、江戸などもあります。境界では膳所、淀、滋賀・岐阜県境など。社寺名では西國三十三所観音霊場の岩間寺、石山寺、三井寺(観音堂)、竹生島、長命寺、観音寺(観音正寺)が多くを占めました。また、比叡山、立木観音、松尾寺などの地域に密接した寺院、さらに善光寺(長野県)もありました。施設名では蓮如上人旧跡、関跡、墳墓など。また設置年月が刻されているものは79基と、意外に少ないでした。方向指示語・記号が68%(176基)についていました。その内で方向指示語では右・左が125基、指示記号(手印、矢印)が31基、また直進を意味する「すく」や「すぐ」は11基でした。

【考察】 方向指示語・記号が32%(83基)には記されていません。これは、“直進なさい”という暗黙の了解があるのだと思われます。また「是ヨリ十二町」のように距離だけが刻されているものも、“もう迷うような道はありません。一本道です”ということでしょうか。つまり里程標(一里塚)のような役目をしていると思われます。上記に取り上げた以外の項目については、□で検討します。

図 - 3 書かれている内容(N = 259)



4) 「みちしるべ」本体の大きさはどれほどですか(地上部分)

高さ(____cm) 幅(____cm) 奥行き(____cm)

【結果】 高さが3mを越える大型のものから、20cm余の小型までいろいろありました。図 - 4(a)、(b)は方柱形「みちしるべ」の高さのヒストグラム、また高さとの幅の相関図を示しました。その一部が地中に埋もれたもの、半ばから破損しているもの、折れたものをコンクリートで接着しているもの、地表にコンクリートで台座を設けたものなどがあって、本来の高さを示していないものも多くありますので、分布の区間幅は20cmとしています。また一部にあきらかに記録ミスと思われる数値があり、有効データから除去しています。高さの平均値は約130cmで、一番大きなものは高さ320cm、幅57cm、奥行37cm(No300 高島・鴨・藤樹)の立派なものでした。大部分は高さ200cm以下、幅30cm以下のものです。

【考察】 大きさは設置者の“意気込み”を反映しているかもしれませんが、高さの平均値は約130cmで、大人の目線にちかいです、これは偶然でしょう。

図 - 4(a) 「みちしるべ」方柱形の高さ分布

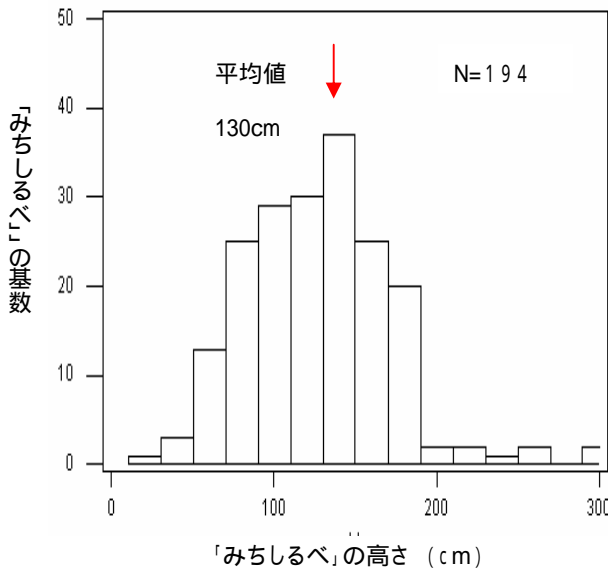
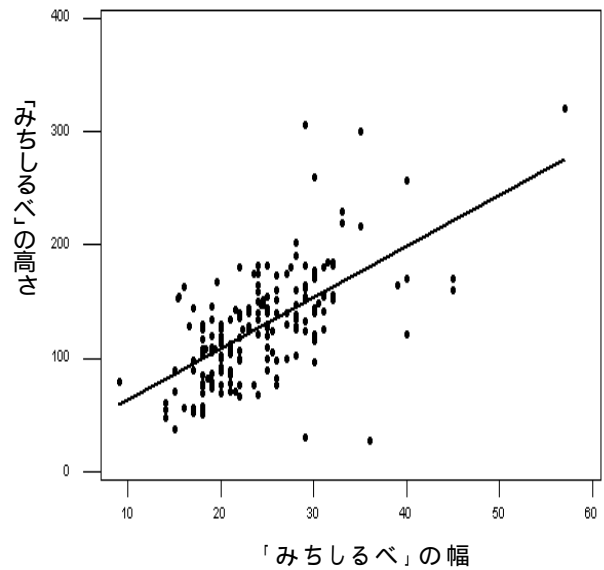


図 - 4(b) 「みちしるべ」方柱形の高さ VS 幅

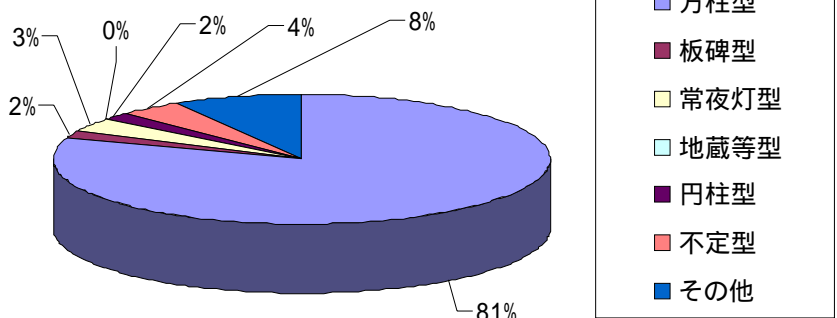


5) 本体はどのような形をしていますか。

- | | | | |
|--------|--------------|---------|------------|
| イ： 方柱型 | ロ： 板碑型 | ハ： 常夜灯型 | ニ： 地蔵・道祖神型 |
| ホ： 円柱型 | ヘ： 不定形(自然石等) | ト： その他 | |

【結果】 方柱型が約80%を占めます。板碑型は、その断面が“板状”のものを意図したのですが、長方形の二辺比を明確に示していなかったため、調査者により、判断が違ったと思われます。しかし、石の「みちしるべ」では板碑型は少ないようです。

図 - 5 本体の形(N = 259)



【考察】 「みちしるべ」は本来、方柱形を

していたといえそうです。シンプルで、なに

より、四面そのもので方角(左・右、直進など)を示すことができるので、最も合理的な型といえそうです。多いことも納得できます。常夜灯型、地蔵・道祖神型は、「みちしるべ」の役割が副次的なものと考えられますので、□で検討します。

・ 昭和後半から平成のものには、市町村での町おこし関連の「みちしるべ」が急増します。各自治体が“工夫”をこらして、いろいろな型の「みちしるべ」を設置していますが、その大部分が「その他」に分類されるものです。この良否については、ここではふれません。

6) 本体の材質は何ですか。

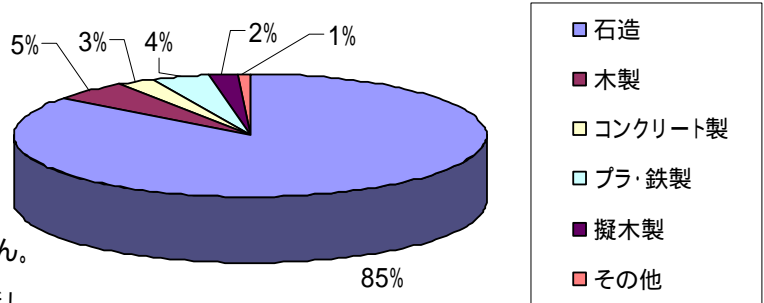
- イ： 石造 ロ： 木製 ハ： コンクリート製
 ニ： プラスティック・鉄板製 ホ： 擬木製 ヘ： その他

【結果】 石造が85%を占めます。

【考察】 半永久的な特質を考えれば、その加工に経費がかかっても、石造というのが、適切な選択だと思われます。石造の方柱型、つまり「みちしるべ」と言えば、大抵の人が、この組み合わせを思い浮かべるに違いありません。

・ 同じ石造でも石の種類によって、風化・磨耗しやすいもの、そうでないものがありますが、今回の調査ではそこまで調べていません。

図 - 6 本体の材質(N = 259)



7) 本体はどのような状況になっていますか(複数回答可)。

- イ： ほぼ元の状態で、風化や破損・汚れが少ない。
 ロ： 補修されていて、文字等が読み(見)やすくなっている。
 ハ： 風化がひどく、読みづらくなっている。
 ニ： 大きく破損している。
 ホ： ひどく傾いている。
 ヘ： コンクリートや敷石などで元より下部が埋められている。
 ト： その他

【結果】 図 - 7はそれぞれ調査全体(259基)、石造製(219基)、明治より以前に設置(78基)の層別毎の集計の結果で、どれも同じ傾向といえます。約20~30%のものが、風化が進んでいるようです。調査していて破損しているものが多そうだったのですが、集計の結果では、意外にも破損しているものは少ないようです。

・ 「その他」には破損状況が書かれていました。トラック・車が当たって破損するケースが多いようです。石造のものを破損させるのは、このような特別な理由がない限り、むずかしいことです。また、道路舗装が繰り返されて一部が土中に埋まってしまう、文字が読めなかったという報告も多くありました。

【考察】 補修されているもの(半ばをコンクリートで接着、台座の修復など)を多く見かけたのですが、集計をしてみると、補修されているものの割合が少なくてした。ただ、これは調査項目で「ロ、……文字等が読みやすくなっている」という文面に問題があるかもしれません。物理的に修復されていても、風化・磨耗で文字が読み

図 - 7(a) 本体の現況(N = 259)

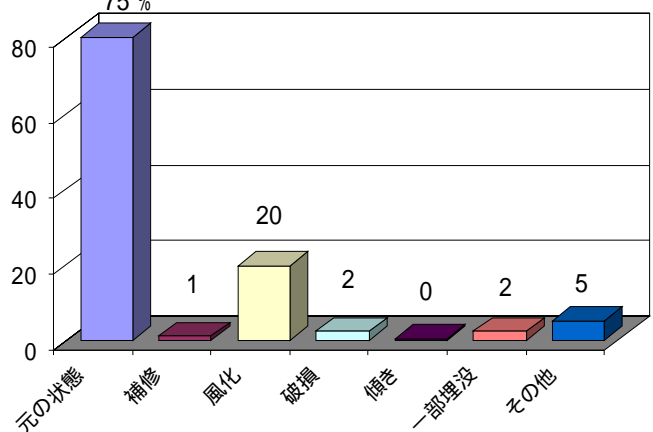


図 - 7 (b) 本体の現況 (明治より以前に設置) N = 78

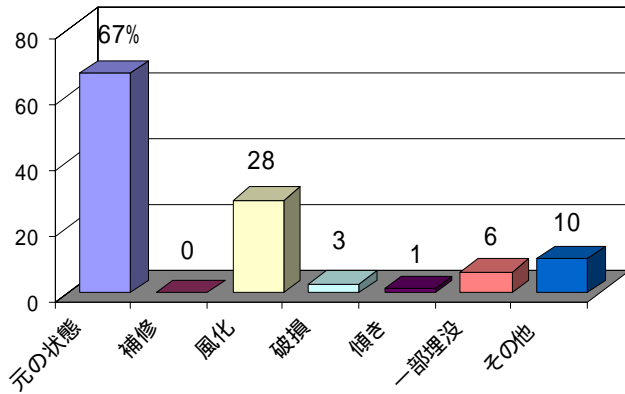
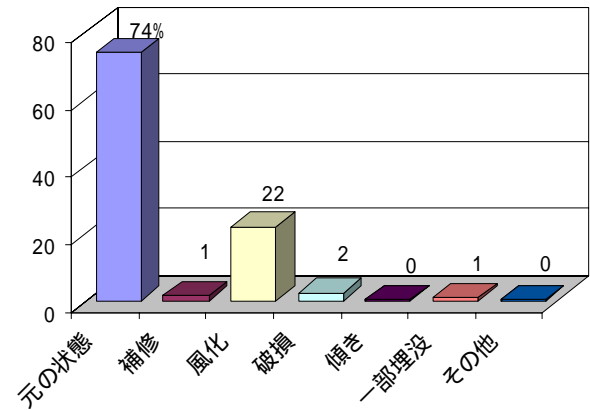


図 - 7 (c) 本体の現況 (石造) N = 219



づらいが多かったので、「口」には回答しないということかもしれません。またNo319は、上部が破損・損失してしまい、その下部のみが道路の縁石のように残っています(この発見もスゴイとおもいますが)。これなどは保存以前の話です。

また現況に関連して、盗難の問題は深刻です。ある日、「みちしるべ」がなくなっても、特に生活に支障をきたすわけでもなく、文化財としての認識の薄いこともあって、今後も盗難の可能性はあります。『近江の道標』(木村至宏著)にはあるのに、現在はなくなっているという報告もあり、管理面での対策が必要です。

8) その「みちしるべ」とほぼ同じ内容で、現代の道標(案内標識)が近くにありますか。

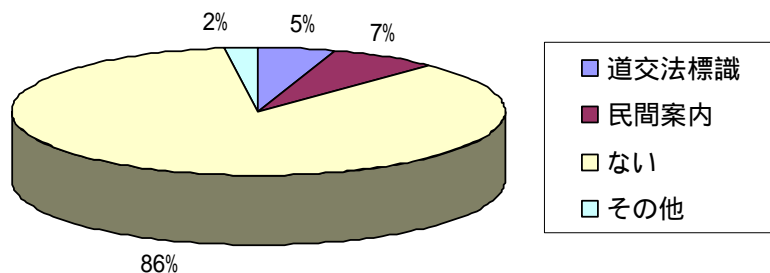
- ア: 道路法や道路交通法によるものがある。
- イ: 観光協会や民間等が設置したものがある。
- ウ: ない
- エ: その他

【結果】 86% (221基) の「みちしるべ」は、その近くに関連する現代の案内標識がないということです。

【考察】 これは現代の道路事情や環境の変遷によって、「みちしるべ」の設置された場所が、すでに要衝ではなくなったことを示唆しているといえます。

一方、12% (= 5% + 7%) の「みちしるべ」は、現代の標識と“競合”していますが、ドライバーも歩行者も、これらの「みちしるべ」を、行先案内標として利用することはないと思われます。

図 - 8 現代の案内標識があるか



□ 調査結果から「みちしるべ」を考える

- 1 文化財としての「みちしるべ」

『広辞苑』には、「文化財とは文化活動の客観的所産としての諸事象または諸事物で文化的価値を有するもの」とあります。そして文化財保護法が対象とするのは文化価値を有するもので有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物・伝統的建造物群、さらに近年では文化的景観があります。この分類からすると「みちしるべ」は民俗文化財の交通資料になると考えられます。そこで“文化価値”の基準としては年代が古い、その形式が時代指標となる、美術品として優れている(形や材質など)、さらに文面の内容が特に歴史的に重要である(金石文としての価値)などが挙げられます。美術品や金石文としてとりあげるには、かなり個人的な要素(知識など)が入りますので、ここでは客観的な指標として年代を検討します。

今回の調査報告から、設置年代が古い「みちしるべ」のトップ10は表 - 1のとおりです。立木神社境内のものはわが近江での最古のもの(『京都新聞版』)とされ、1680年に製作されています。その役目を終えたとはいえ、約330年の後の今も健在です。一部が磨耗して判読困難な部分もありますが、説明板が付置されているので内容が理解できます。「みちしるべ」としての十分な情報が発信されていますが、記載内容のレイアウトは複雑で、「みちしるべ」が一般的なものとして定着する以前のもの(古さ)との印象を受けます。時代が降るとそのレイアウトにも工夫がみられ、分かりやすい(利用しやすい)「みちしるべ」が登場します。

表 - 1 「みちしるべ」設置年代の古いものトップ10

西暦年	紀年銘	設置場所	調査No
1680	延宝八 庚申年	草津市4丁目 立木神社境内	260
1717	享保二 丁酉年	米原市柏原 米原市柏原長沢	80 83
1719	享保四 己亥年	野洲市行畑 蓮照寺内	144
1744	延享元 甲子年	守山市守山町	150
1758	宝暦八 戊寅年	大津市下阪本町 酒井神社境内	167
1759	宝暦九 己卯年	大津市木戸 甲賀市信楽町宮町	6 250
1766	明和三 丙戌年	大津市追分町5 - 5	295
1775	安永四 乙未年	高島市今津町保坂	305
1788	天明八 戊申年	甲賀市土山町北土山	32
1798	寛政十 戊午年	彦根市西清崎町	93
【参考データ】 1532	天文元 壬辰	大阪市福島区	最古のもの 『京都新聞版』

() 調査報告が重なっている場合には、若い登録番号を掲載しています。

次に設置年代が刻されているもの(79基)についてその年代分布をプロットすると図-1のようになります(区間幅20年)。1680年から2007年までにわたっています。江戸前半の古いものだけが紛失、廃棄、あるいは盗難にあったと考えるよりも、そもそも「みちしるべ」そのものの設置が、この分布の通り江戸後半から増えてきたと考えたほうがいいのではないのでしょうか。江戸後半および大正後期から昭和初期にかけてピークがありますが、これらの時期には世情が比較的穏やかであったことを考えあわせると、何か示唆的です。

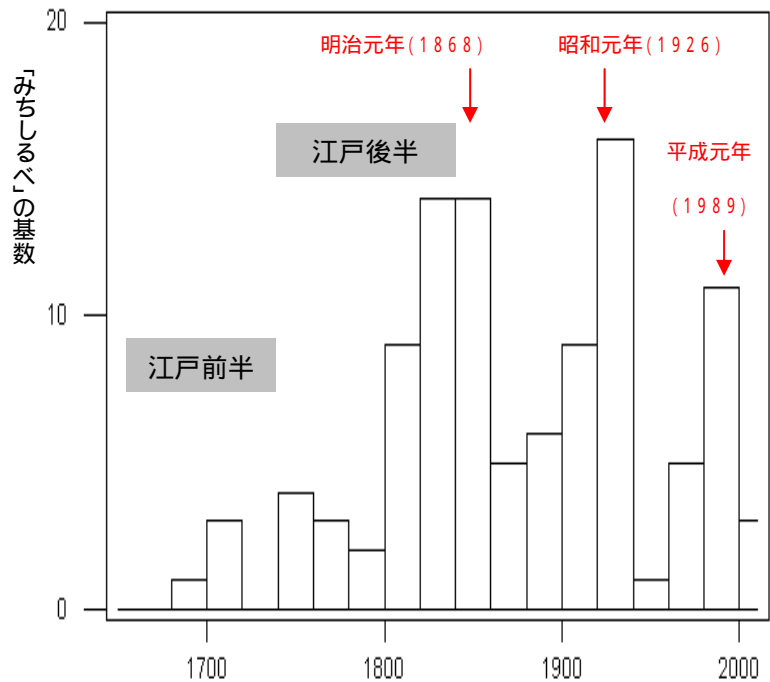


図-1 「みちしるべ」の設置年代分布 (N=79)

また昭和後期から平成にかけてピークがありますが、これはあきらかに町おこし関連の「みちしるべ」が急増することを意味しています。これらには擬木製や看板様の案内板(東海自然歩道など)の調査報告も含まれています

なお、No141(野洲・市役所・三上妙見)は、彦根の八百屋太兵衛さんが願主となり萬延元庚申年に設置されたものです。この「萬延」は1860年3月18日から翌年2月19日までの一年未満の短い時代でしたので、この「みちしるべ」は「萬延元年」の紀年銘をもつ唯一の、貴重なものかも知れません。野洲市庁舎の前庭にあるので、盗難の心配はなさそうです。

-2 交通資料としての「みちしるべ」

「みちしるべ」の本来の役割は多くの人々が行くであろう「行き先」(街道を含む)を案内することですから、「みちしるべ」が発信すべき必須不可欠な情報は行き先とその方向指示で、他の情報は副次的なものといえます。現代の道路交通法等の案内標識(図-2)においても、この二種類の情報のみが記載されており、むしろ他の情報を含むことが、かえって「みちしるべ」の本分を阻害することになるといえます。ここでは交通資料としての「みちしるべ」を考えます。



図-2 道路交通法に基づく案内標識

街道・道路名からみえること

報告された街道名・道路名には中山道、東海道、北國街道、北國海道、八風街道、朝鮮人街道、濱街道、芦浦街道などの街道名がりましたが、報告数としては「京みち」や「いせ道」のような通称名も多くありまし

た。これらの道は、ある時期には東海道の一部でもあったのですが、“京へ行く時に使う道”、“伊勢に行く時に通る道”としての認識のほうが強く、「みちしるべ」には“東海道”とは言わず、通称名を刻したものと考えられます。また地域の主要道でも、「八幡みち」などのように、その地での生活に密着した通称名で呼んでいたようです。たしかに、現代の我々も人から道を聞かれた時には、“八幡への道を通して…”と言うことはあっても、“朝鮮人街道を通して…”というような教え方をしないですね。「みちしるべ」には、より身近な通称名を刻しているといえます。



図 -3 国立歴史民俗博物館に展示されている、近江の「みちしるべ」

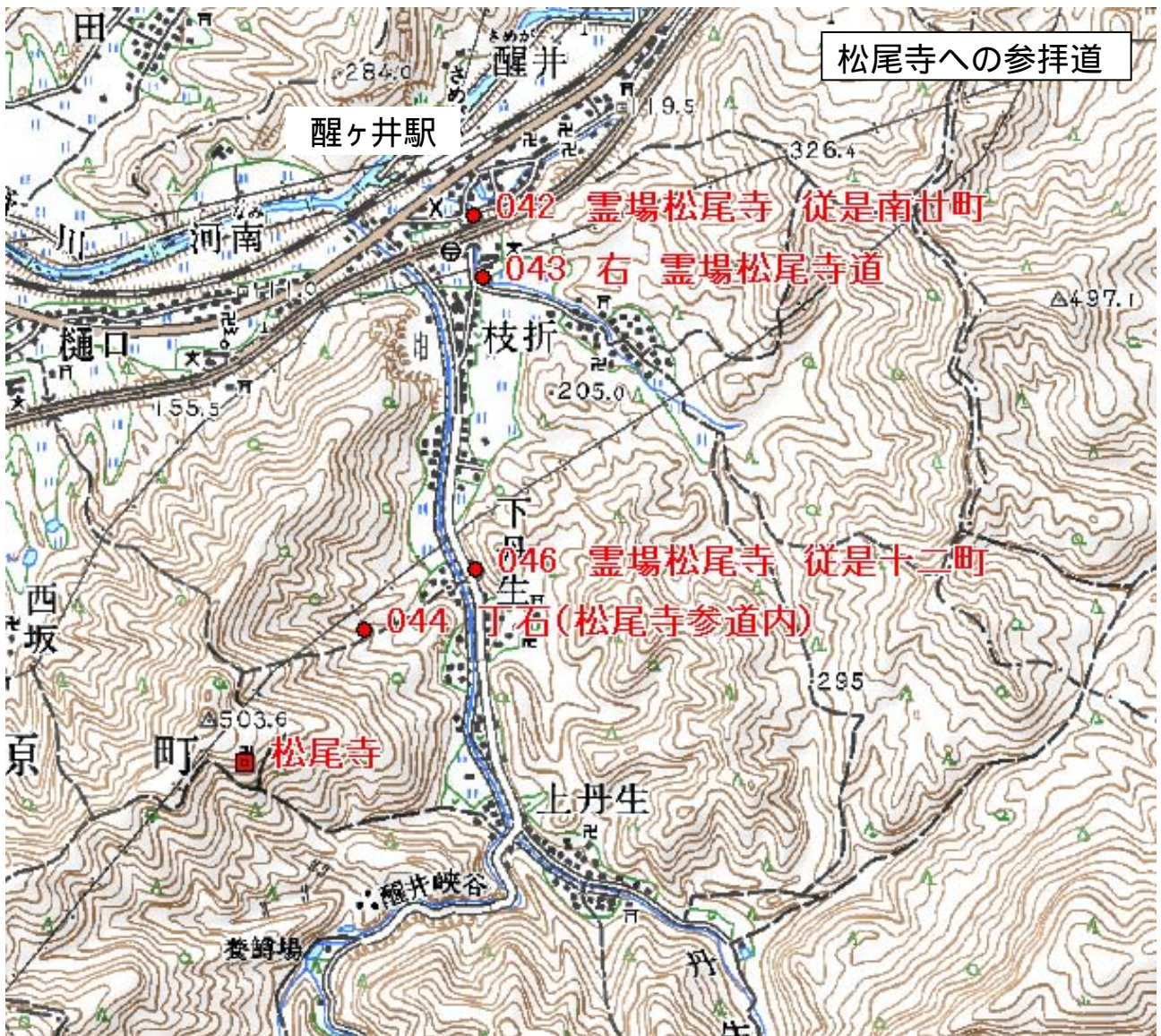
前述の街道名をみて気づくのはメジャーな(幹線)道路が多いということです。近江という地域の特徴を示していますし、街道関連の図書においても、“近江は街道の国”との表現が多いようです。国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の“旅する庶民”というテーマ室の入口には図 -3のような「みちしるべ」が展示されています(もちろん、レプリカですが)。これはわが近江の「みちしるべ」です。東海道と中山道の分岐点にあるもの(草津・追分)と、東海道と矢橋道(舟乗り場への道)の分岐点にあるもの(草津・矢倉・矢橋)です。この博物館では国内外の重要な文物がすべてレプリカ展示されて、日本の歴史を系統だって学べるようになっていました。日本を代表する博物館にわが近江の「みちしるべ」があることは、いみじくも近江の地理的な位置づけを示していると思われまます。

道路の変遷をたどる

今回の調査では、“「みちしるべ」を探すために道を尋ねる”という本末転倒のことを経験された方も多いと思います。「みちしるべ」を探すに当たっては、今日的な道路(国道1号など)よりも、むしろ旧来の狭い道、昔からの集落の中央通り、また集落から少しはずれたところなど、皆さんの“カン”を頼りに出かけられたことでしょう。この“カン”を持っているということは、すでに道路の変遷をある程度認識していることに外なりません。だから、“あの辺りには、在りそうだ”と思うのです。「みちしるべ」の設置場所はそのような道路の変遷を示しています。以下に、今回の調査報告をもとに、道路の変遷をたどることにします。皆さんで考えてください。

(1) 道路の変遷をたどる：松尾寺へ参拝する

近江西国霊場第十三番札所普門山松尾寺(米原市下丹)は本尊空中飛行観音で知られていて、戦時中は航空機関連の人が訪れたということです。調査報告に基づいて、「みちしるべ」をプロットしました。今、あなたは「醒ヶ井駅」に着いたところです。松尾寺へは「みちしるべ」が設置されていますので、無事にお参りしてください。ここでは道路の変遷が少ないようですので、迷うことなく参拝できそうです。ただし、丁(町)石とは参道などに一町ごとに設置して、あと何町で本殿(本堂)に至るかを案内している石標です。

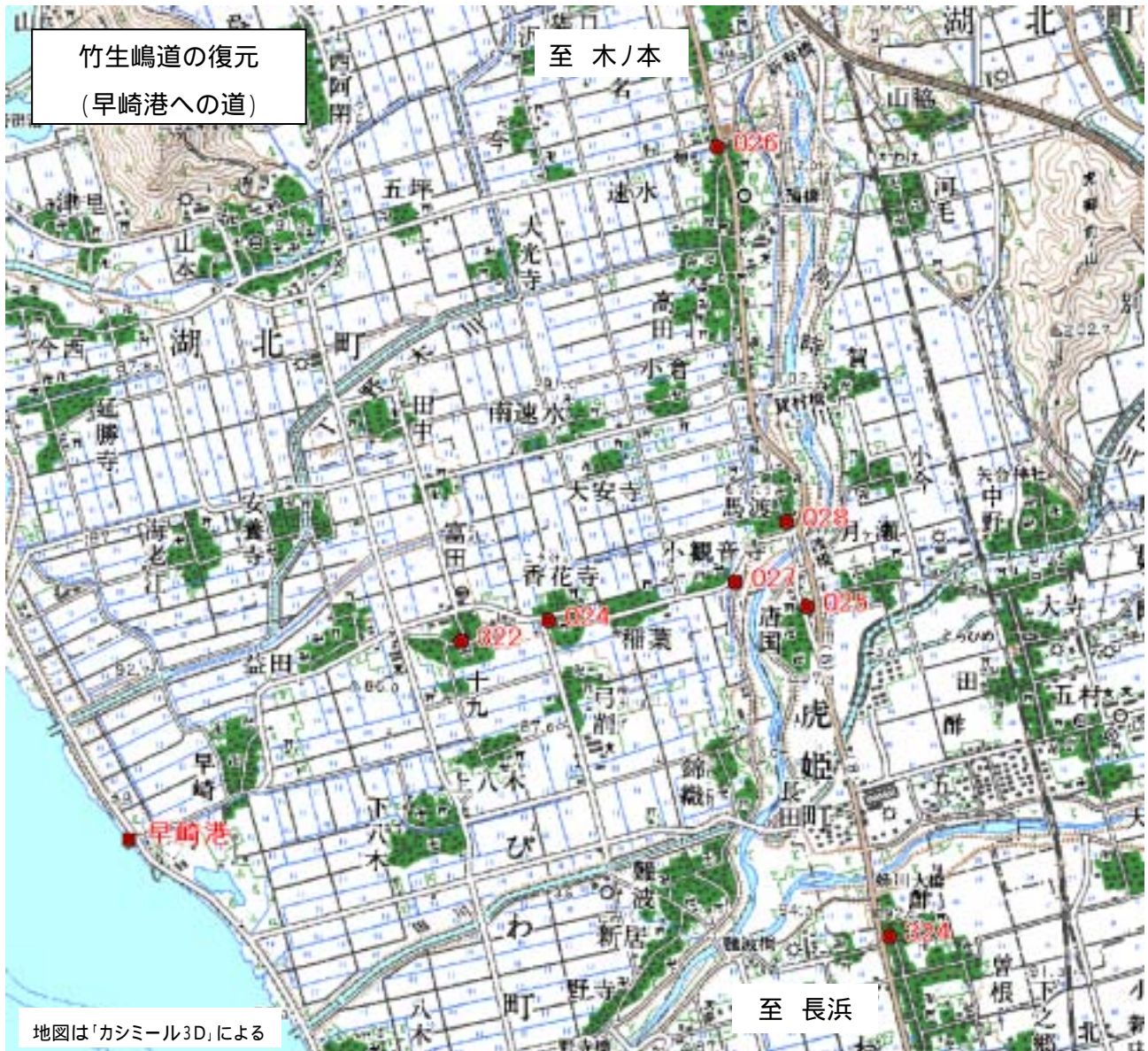


地図は「カシミール3D」による

(2) 道路の変遷をたどる：竹生嶋道を考える

古くには西国三十三所観音霊場の巡礼ルートは二十九番・松尾寺(舞鶴市)から今津にきて、そこから船路で三十番・竹生嶋(湖北町) 船路で三十一番・長命寺(近江八幡市) 船路で三十二番・観音正寺(安土町)へいくコースと、竹生嶋の後は早崎港(湖北町)へ渡り、そこから陸路で長命寺、観音正寺とまわり、いよいよ最後の札所の三十三番・華厳寺(岐阜県谷汲)へ向うルートがありました。ご承知のように、竹生嶋は観音詣だけではなく弁財天や都久布須麻神社もあり、今も多くの参拝者が訪れます。

今回の調査では長浜市、湖北町付近で、竹生嶋に関連すると思われる「みちしるべ」が報告されています。それに基づいて、地図に「みちしるべ」をプロットしました。新道ができたり旧道の一部がなくなったりして、竹生嶋道(早崎港へ通じる道をそう呼んだ)の変遷が激しいようです。あなたは木ノ本(あるいは長浜)にいます。ここから早崎港に行き、そこから竹生嶋に渡る予定です。「みちしるべ」にある周辺の地名等も参考にして、出かけてください(「みちしるべ」の向きも考える必要があります)。



- No024 右 長浜 なんば No025 右 木ノ本みち | 左 元三大師 | すぐ 京 長浜 No026 右 竹生嶋道
 No027 右 竹生嶋道 No028 左 竹生嶋本道 No322 左 竹生島道 | 右 山本 No324 右 竹生嶋道

巡礼路(じゅんれいみち)とは

調査票によれば、旧今津町、旧マキノ町には文字通りの「志ゆん礼以みち」(No336)、「志由ん礼道」(No331)の「みちるべ」があります。No336は西國三十三所に関する巡礼路ですが、No331はその設置場所から近江西國三十三所に関係した巡礼路と考えられています(『京都新聞版』)。いずれにしてもそのゆかしい名称のひびきに誘われて、ちょっと出かけようかという気になりますが、その実態は忍耐と体力を要する苦行であったといえます。近江にある西國巡礼の寺では、湖上あり、峻険な山道ありというように、三十三所の中でも屈指の難路がありますので、近江の巡礼は大変であったとの記録が残されています(佐和隆研『西國巡礼』社会思想社 1970年)。今日の東海自然歩道のような、“公式”巡礼路が整備されていたわけではありませんが、口伝の巡礼路があったはずで、今回の調査の大津市、近江八幡市や安土町付近での「かんおんみち」、前述の長浜市や湖北町付近での「竹生嶋みち」などがそれに当たると考えられます。今回の調査報告から湖南、湖西、湖東における近江での巡礼路が復元できそうです。文献史料から古道を考えるのはよくありますが、今回の「みちるべ」の調査からの復元は実証的で説得力があります。

-3 生活資料としての「みちしるべ」

「みちしるべ」は設置する人と、それを利用する人がいることによって、初めて「みちしるべ」としての機能を果たすといえます。そして、そのどちらの側の人にとっても動機があるはずで、すなわち、設置するに至った動機、利用する(出かける)ことになった動機があるわけです。では、どのような動機があったのでしょうか。きっとその人にとって人生の画期であったと思われる。そこに生活情報や精神世界をみることができるかもしれません。

設置する立場： その動機はどのようなものか

どのような人々が、またどのような動機で設置したのでしょうか。調査報告では、設置者や願主が刻されているものには、その設置動機についても記されているものがあります。その動機には公的なものと私的なものがあります。事例が少ないですが動機と設置について考えてみました。

(1) 公的な動機

「役人が指示した」(No143)というのがありますが、その理由はわかりません。また、市町村が設置しているものは、「みちしるべ」そのものには設置動機は記されていませんが、パンフレットなどの周辺情報から、観光誘致整備事業、いわゆる町おこし策として設置したことが推定できます。これらは町の風景の一つとして懐古的な形をし、旧跡の内容が記載されています。各市町村の町おこしにける姿勢が表れているようです。

(2) 私的な動機

個人が設置しようと思いつのは、全く個人的な出来事が動機となり、ゆかりの場所に「みちしるべ」が設置されています。設置するための費用負担が大変ですが、それを上まわる動機であるということでしょう。代表的な動機には祈願成就(No260)、参詣百回達成(No106)などがあり、これらは「みちしるべ」の目的を持ちながらも、記念碑の性格をもっています。またNo335には設置者名や動機も刻されていませんが、旧今津町の石田川の下流の堤防脇に設置されていて、石柱の上部には龕を施した半肉彫の地藏菩薩像をもつ素朴で端正な石道標です。そして「右 京十七里 善光寺江八十五里」とあります。琵琶湖の西岸の今津で、善光寺への案内をすとは、すこし遠方過ぎる気がします。だから、これは設置者が善光寺への参拝をすませた記念に造られたと考えられ(『京都新聞版』)、やはり記念碑としての性格を持つと思われます。

その一方で、設置場所の選定にあたっては利用する側の便宜や景観を考えるよりも、より目立つ所を選んで設置しようとするあまり、同所に「みちしるべ」が乱立する状況となったケースがあります(例えば図 -4の状況)。各人の作善行為(仏教的な善意を行うこと)ではあるのですが、今日風という近隣の景観を損なう「みちしるべ」であったのではと危惧します。当の設置者は、己が善意が未代まで語り継がれることを意図していたと思われるのですが、いかがでしょうか。このよう



図 -4 立木観音旧参道口付近の「みちしるべ」の乱立状況

に個人の設置による「みちしるべ」では、記念性がより強くなると、“誰もが迷わない場所”、あるいは“誰もが分かりやすい場所”に設置されているのが特筆されます。

団体によって設置されたものも、やはり私的な動機によるものです。寺社の信者でつくる講組織(伊勢講など)、会社・組合、船仲し、旅館などの団体によるものがあります。各団体の関係する寺社への案内をするとともに、その仲間との連帯を深める効果もあるかもしれません。ただ動機は明確ではありませんが、たとえば当該寺社の祖師の遠忌、団体の設立周年などが考えられそうです。またこれら団体が設置する場合には、複数基の「みちしるべ」が寺社への順路に沿って設置されることに特徴があるようです。まさにファミリー道標ともいふべきもので、京都・寿永講による白髭神社への案内(No007、056、283などで、天保七丙申年の設置)、善進堂による近江西国十三番松尾寺への案内(No042、043、046で、昭和二年に設置)などの報告がありました。

利用する立場：どこへ行くのだろうか

案内先(地名を除く)としては特別な施設や旧跡などは少なく、寺社名が圧倒的に多いことが分かります。まず、西國三十三所の寺々に関係するものが多数ありました。近江での西國三十三所の寺は正法寺(岩間寺、第十二番)、石山寺(第十三番)、三井寺(観音堂、第十四番)、宝蔵寺(竹生島、第三十番)、長命寺(三十一番)、観音正寺(三十二番)があります。それらの寺の近辺では、いちいち寺名ではなく、「くわんおん寺」、「久王ん於ん」などと刻されていて、その地域では“観音さん”といえはすぐ分かるようです。西國三十三所寺への案内は当然としても、その近辺の地域でしか知られていない寺社への案内も非常に多いことに驚きます。一般論としてですが、前者の寺々は全国的にも著名であって不特定な人々が“観光”を主目的として訪れたのに対して、後者の寺社ではその寺社に有縁の人々が信仰心にかきたてられて参拝したものと思われまふ。人々の行先の筆頭が寺社であるというのは興味深いことです。つまり、どうしても行かざるを得ないという場所ではないのですから。いくつかの推定ができますが、皆さんなら何時、何故そのような場所に行こうとしますか。おそらく皆さんが推定される動機は、きっと昔もそして今後も、人々を寺社への参拝に向かわせるものなのでしょう。以下には、ちょっと珍しい行先を紹介しますので、楽しんでください。

- ・ 親心から：“子供の病気をよく診てくれるお医者さんがいて、それを訪ねてやってくる人々向けの「みちしるべ」というものもあります(No039)。この「みちしるべ」そのものには、由来は書かれていません(口伝から分りました)。
- ・ ちょっと渡し場へ：「大津 舟わたし」(No019)、「山田船乃里者(ふねのりば)」(No108)、「かただ舟わたし」(No135)などは琵琶湖周辺ならではの「みちしるべ」ですね。それぞれ主要街道から分かれた「舟わたし」への道があったのでしよう(No019以外は、移動されています)。
- ・ これは長い：“行き先はどちらですか”と問われて、“はい、「史蹟大石内蔵助良雄五代目之祖大石良信邸附及菩提寺跡」に行きたいのですが、行く道を教えてください”(No158)。落語の寿限無(じゅげむ)の「みちしるべ」版ですね。この「みちしるべ」を話題にすると、たいへんな会話になりそうです。

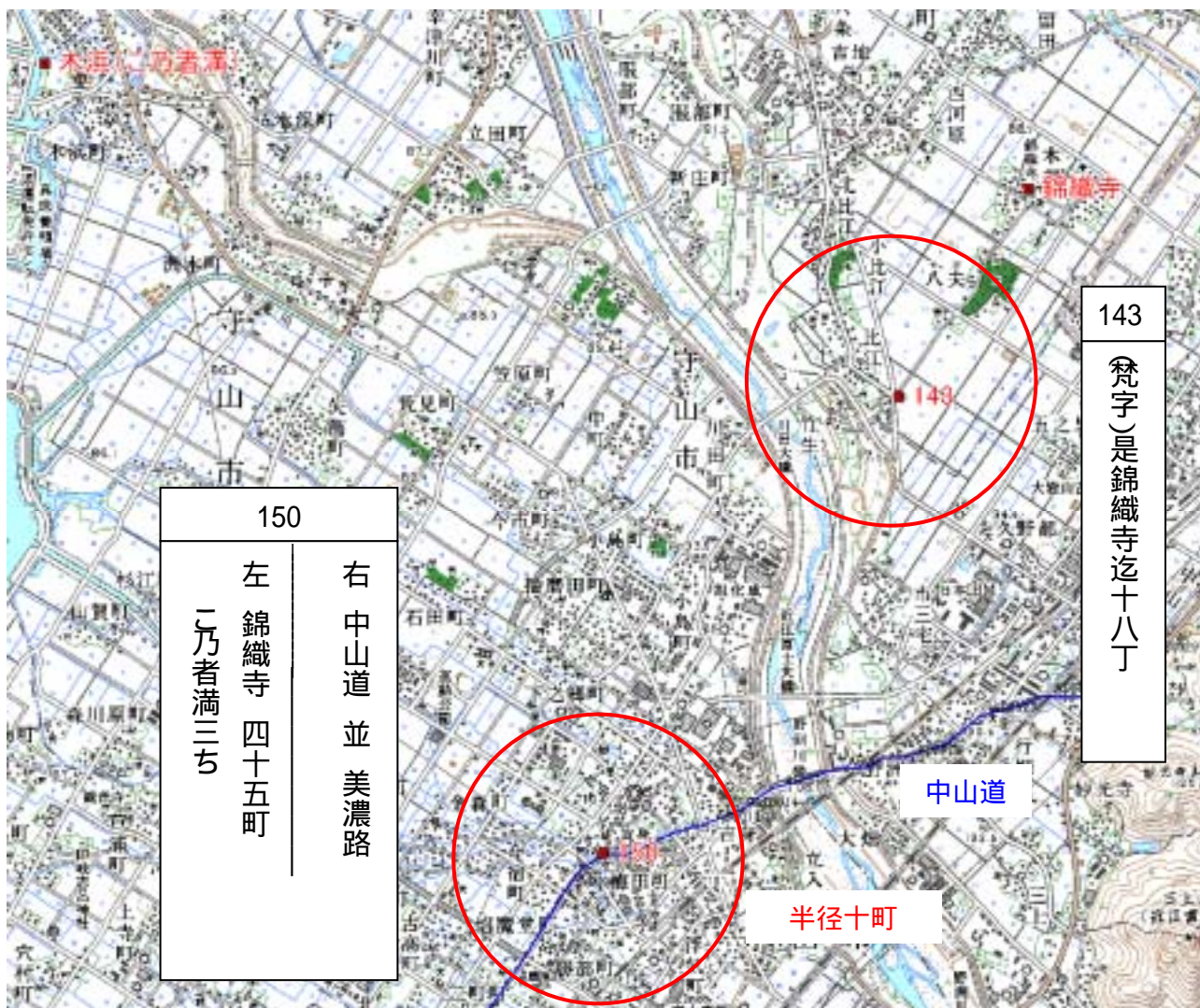
人々の地理感覚・距離感覚

今日、旅行雑誌やインターネットで旅情報や地図が簡単に入手できるので、旅する前には、すでに頭には

当地のおおまかな地理や距離が入っています。しかし詳細な地図が入手しにくい時代においては、「みちしるべ」は地図に代わる役割を果たしていたでしょう。だから、その設置場所も注意深く選定され、道路の分かれ道や往来の激しい場所が設置場所になることは予想されます。ではそのポイントが目的地から一里の地点がいいのか、あるいは十町の地点が判りやすいのか、まさに当時の人々の地理感覚や距離感覚を反映しているといえます。いわゆる土地勘や距離感といえますが、当然、現代の我々とは異なると思われるし、仕事や立場によっても違っていたと思われます。

(1) 地理感覚、距離感覚をためしてみる

当時(延享元年、1744)の人々の地理感覚や距離感覚を考えてみましょう。No150「みちしるべ」は中山道と“このはま道(木浜道)”分岐点にあり、木浜道と錦織寺を案内しています。木浜は琵琶湖対岸の堅田への舟のわたし場です。錦織寺は浄土真宗木邊派本山(旧中主町)で、木浜道を経由して行ったようです。またNo143は木浜道から分かれた、錦織寺への旧参道にあります。当時の道が拡幅されたり、新道ができたり、また野洲川の河道も変わっていますが、当時の「こ乃者満三ち」の痕跡があります。「みちしるべ」に刻された地名や距離などで、あなたの地理感覚や距離感覚を試してください。私は、もうすこし近距離での案内がほしいなという印象です。なお距離の単位として里・丁(町)などがあります。江戸時代においては丁と町の両方を使ったようです。1町=109m、1里=3927m、1里=36町(ただし伊勢路では48町、佐渡では50町など、統一されていなかった)。



(2) 一里塚あれこれ

古くの距離感覚を示す端的なものとして一里塚があります。なぜ里程標として一里が使われたのか、どうして五里ではなかったのか。そもそも、なぜ約4Kmを一里という単位としたのか。同じようなことが、山岳寺院等への参道にある丁石についても言えます。いろいろ推定ができますし、ちがった世界に興味がわいてきますが、とにかく人々の生活の中にこの一里や一丁(町)が単位となった距離感覚が定着していたのでしょう。ここでは一里塚のいくつかを紹介します。



図 -5 一里塚いろいろ

a) 中山道・守山今宿 (No140) : 一里ごとに街道の両側に五間四方の塚を築き榎や松を植えて里程標とした。 b) 大津・和邇 (No029 他) : 榎の文字を刻んだ顕彰碑が建っているが、今も堂々と道路の真中にある。 c) さざなみ一里塚 (No138) : 現代版一里塚。湖岸道路に沿って設けられている。

-4 文字資料としての「みちしるべ」

古い「みちしるべ」を調査していて、その文面のレイアウトがバラバラであることに気づきます。たとえば近江の最古(1680年)の「みちしるべ」では行先、設置者、設置動機、設置年代、さらに梵字などが“雑然”と刻されています。まるで、古文書を想起させます。しかし江戸後半(1800年代以降)にはスッキリとした体裁となり、「みちしるべ」が定着して市民権を得たことをうかがわせます。

また「みちしるべ」が文字情報であるので、文字を読んで理解するというのが前提となっています。この自明のことも、我々現代人にとっては読めない、理解できない文字が多くありました。当時(昭和初期頃まで)は刻された文字がキチンと読まれ、理解され、設置者と利用者の意思疎通がとれていたのでしょうか。実際はどうだったのでしょうか。

文字を読む

江戸時代の「みちしるべ」の多くは変体仮名で刻されています。変体仮名は仮名的一种なので一字一音で

使われますが、我々がつかう今日の平仮名(1900年小学校令施行規則で採用された)と違う字源や、またはくずし方が違うので(調査票と一緒にお渡ししたものです)、一般には読めないことが多いです。また漢字も草書体(くずし文字)で書かれているものがあり、読みづらいですね。しかし当時はそれが“普通”だったということです。また発音には漢音と呉音があるし、さらにやっかいなものに異体字というものもあります。これらについては国語学関連の本で学んでください。

ところで識字とは、文字の読み書きができることをいいますが、15才以上の人口に対する推定識字者数の割合を百分率で表したものを識字率といいます。これをNetでいくつかの資料を調べましたが、下記に引用するものとほぼ同じでした。

インフォルム社(DTP組版の出版会社)のHPからの引用:

「幕末期(1854-61年頃)の江戸の識字率は男子が79%、女子が21%で、武士は殆ど100%読め、農村の僻地でも20%は読めたという。これは当時の世界の中では群を抜いていた。明治になり福沢諭吉は「通俗国権論」で幕末の日本の識字率は世界一であると誇っている。明治15年の文部省年報では、滋賀縣での男子識字率は91%、女子は50%、全体では70%となっている(2000年の日本の識字率は99.8%)。」

この数値について皆さんの印象はいかがですか。きっと育った環境によって印象が異なると思いますが、私はこの識字率の高さに驚いています。

しかし旧字を読むのにたいそうな勉強をしなくともよいことが、今回の「みちしるべ」調査で分かりました。たとえば調査を始めた頃には“道(草書体)”という字を読むことができませんでしたが、いくつか調査をしていると、同じ書体が繰り返し使われているので、すぐ分かるようになりました。あるいは、読めなくとも近くの人に教えてもらうこともできるので、記されている文面が分かるという点では問題がなかったのかもしれない。試しに、図-6の文字はいかがでしょうか。



図-6 文字を読む
a)、b)は草書体
c)は仮名(解答P21)

文字を刻す

今回の調査を通して、いろいろな書体の文字に出会われたことでしょうか。ではどのようにして石面に刻んだのでしょうか。石材店で取材しましたので、ここに紹介します。

(1)まず現代の文字の刻字法は、図-7に示すもので、サンドブラスト法と呼ばれています(断面図を示しています)。製作の流れは以下の通りです。文面とその書体が決まると、それを刻面通りの大きさに、パソコンで描画して原図とする。原文がある場合には別紙に手作業で転写して原

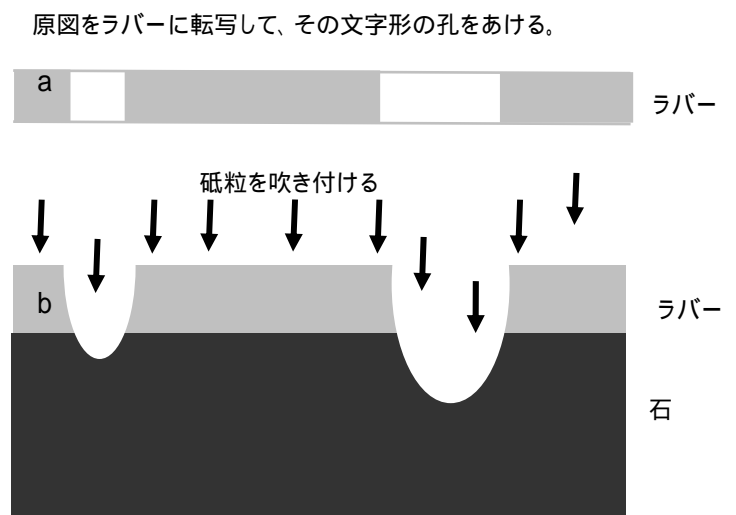


図-7 現代の刻字方法(サンドブラスト法)

図とする(揮毫による歌碑面などにはこのケースが多い)。この原図を薄いラバー板に転写し、彫刻刀でラバー板に原図の文面を彫りぬく(a)。そしてこのラバー板で石面を覆い、上から微粒の砥石(砂)を噴射して文字面だけを彫るというものです(b)。まさに、“彫る”、“掘る”というイメージで、とても“刻する”というものではありません。

(2)昭和30年代頃までは、原図を石面に転写し、それにノミをあて、槌でたたいて刻していたとのことです。書体や字の大きさ、画数によって、適したノミを使い分けたようです。この石材店には図-8(a)のようなノミが保管されていました。昭和30年頃以降では、槌でたたく代わりに圧縮空気や電気でノミを上下運動させる機具が普及しました。(b)のノミを、(c)の駆動部の先にとりつけるもので作業も随分と楽になったとのことです。現在、これらのノミを使うことはない。しかし石刻技能を認定する技能士検定(厚労省)においては、なおもノミを使かって認定試験をしているようです。また、ノミを使うと刻部の周囲に亀裂が残ることがあり、そこから風化が進むので石碑の寿命にも影響してくることでした。そういえば調査時に、石そのものがしっかりしているのに字端がダレているものを見かけましたが、石の種類だけではなく、前述のような製作(刻字)技術の習熟度も関与しているということでしょうか。



図 -8 刻字用のノミ(守山市・八田石材店にて)

- a) 槌でたたく各種のノミ
- b) 圧縮空気や電動用の各種のノミ
- c) 圧縮空気用の上下運動駆動部

漢字の用法・名称の起こりなど

「みちしるべ」は行き先を案内するものですが、そこに刻された文字や名称は、当時の用法や習慣を反映していると思われます。詩歌や経文などは設置者の心情を表わしています。それに対する感じ方も、読む人(皆さん)によってちがってきます。以下にはいくつかを挙げましたが、調査資料を参照されて、皆さんも考えて(楽しんで)ください。

(1) 従是と自是(コレヨリ)：

「コレヨリ」を表わす漢字として「従是」、「自是」がありました。「従是」は空間の起点を、「自是」は場所の起点や経由を示す(『新漢和辞典』 諸橋轍次他)ので、従是北淀領(領域・境界)、自是錦織寺迄四十丁(場所)のように、本来は使い分けるようです(図 -9)。しかしあまり厳密なものではなかったらしく、「三上妙見従是十三町」のような用法も報告されています。従是、自是のどちらの場合にも、方角が指示されていないことが多いので、進むべき方向は明確で



図 -9 自是と従是

あったのでしょう。つまり、“三上妙見へはこの道を十三町ばかり行ってください”という、暗黙の了解があったと思われます。すなわち里程標の性格が強かったのだと思われます。

(2) 石敢當(No302など):

「せきかんとう、いしがんとう」と読みます。沖縄や九州南部で、道路の突き当たりや門・橋などに、「石敢當」の三文字を刻して建ててある石碑。中国伝来の民俗で、悪魔除けの一種(『広辞苑』)というものです。滋賀にどうしてあるのかは興味深いですね(「天保十三年安原氏建之」となっています。安原さんは沖縄のご出身かもしれません)。では「石敢當」がどうして悪魔除けとなるのでしょうか。「敢」には「あえて～をする、強いて～をする」の字義があり、「敢問」は「おそれながら お尋ねしたい」と丁寧な依頼語としての用法があります。そこで「敢當」は「おそれながら を當てる」となり、つまり「石敢當」は“石が悪魔を當てる”という発想から、この三文字を悪魔除けとしたのかもかもしれません。今度、沖縄や中国(China です)に行かれたら、ちょっと注意してください。石敢當の近くに悪魔が倒れているかもしれません。

(3) 観音堂号西方寺(No006、284):

これは長い名称のお寺です。近くにこの寺があるかどうか調査が必要ですが、これは「西方寺」のことを指しているとも考えられます。「号」には「呼ぶ、称する」の字義があり、この場合「観音堂と号する西方寺」と読み、「通称、観音堂である西方寺」の意味かもしれません。

- 5 今後の展望

「みちしるべ」を楽しむ

「みちしるべ」調査では、いろいろな楽しみや感動を経験されたことが、調査票の項目(10)、(11)、(12)から伝わってきました。MTさんは122件もの調査報告をされました。調査日をみていると6月～8月までの毎週末(土日)、さらにお盆休暇も返上して調査を進められたことがうかがえます。大変だっただろうと思う反面、ずいぶん楽しまれたものだと、推察いたします。MHさんは朽木の山深く分け入り、福井との県境まで調査をされました。それは「左 山道」(No353)の道標でした。これはもう調査ではなく登山だと思いました。大きな達成感を覚えられたことと察します。そんな苦勞をされたのですが、困ったことに、私の地図ソフトにはその“道”が描かれていないのです。そこで等高線をもとに“私も苦勞して”推定場所をマークしました。つまり、地図にない道にも「みちしるべ」があるということは、またそれを必要とする人がいるということです。KNさんは、図 -10のような“発見”をされました。かつてはここで行先を案内していたのですが、上部が損失し、まるで道路の縁石のような状況です。それにしても、「みちしるべ」探索への執念に脱帽します。次にここを通るときは、この「みちしるべ」との対面を果たしたいと思います。



図 -10 道路の縁石になってしまった「みちしるべ」(No319)

こうした調査過程をふまえて、次はこれらの「みちしるべ」を楽しんで下

さい。目的地への道を案内しているのですから、そこに至る経路の復元や元の位置の推定などのように、現在の地図の中で考えると、「みちしるべ」を楽しむことができそうです。せっかくの調査結果ですので、ご自分の方法と考え方で「みちしるべ」を楽しみ、是非、「掲示板」へも投稿してください。まさに、「みちしるべ」を探して、考えて、楽しむということでしょうか。

今後、「みちしるべ」を設置するなら

「みちしるべ」を文化財として、基準を設けて取捨選択をし、それを登録・保存することが重要と思われます。一方、年々、現代版の「みちしるべ」ができつつあります。本来、「みちしるべ」は行き先を案内するものですが、町おこしとしての「みちしるべ」は、“来てもらう”ために案内するものとの印象を受けます。そのため、懐古的な形や趣向をこらしたものがあります。また復古的な意味合いを込めた刻字をしているのですが、書体に新旧が混在しているものがあります。これらが自治体の主導であるなら、その自治体の品位をおとしめていることに留意すべきです。

復元や新設するにしてもその適所があるはずであり、その町や地域の景観を考えた「みちしるべ」を設置すべきです。全国統一（せめて近江として）の設置基準を設けるのが良いと思います（設置することの良否はここではふれません）。

今後の見通し

今回の調査は終了しますが、今回の調査での課題として、

- ・ 調査地域に偏りがある 全県にわたる調査に発展させる
(調査票を琵琶湖博物館に常備しておき、来館者にも気軽に参加してもらう)
 - ・ 設置場所、大きさ(地中にあるもの)、文面内容(磨耗が激しいもの) 精度をあげる
 - ・ 道標の保存や修復、また道標の新設(町おこし的な)についての提言
- などが挙げられます。今後も、近江の道標(以後、「みちしるべ」ではなく、道標と呼称します)の継続調査を進めたらどうかと考えています。皆様のご意見をお待ちしています。

最後に担当者から：

調査活動、お疲れ様でした。調査票の行間や、コーヒーをこぼした痕跡のついた調査票、クシャクシャの調査票などをみて皆さんの奮闘振りを想像しました。まとめに関して、浅学のために誤解しているところもあると思われます。□ ではかなり独断的な考えも入っています。また、とりあげた調査報告にも偏りがあるかもしれません。いずれに対しても忌憚のないご意見をお願いします。琵琶湖博物館の学芸員の方々、入力に協力いただいたフィールドレポーター・スタッフ、コメントいただい多くの方々に感謝いたします。

図 -6の解答： a) 北国海道、 b) 従是西膳所領(これより西、膳所領)、 c) ひ王古者久ふつく八ん(びわこはくぶつくわん(変体仮名では濁点は表示せず))

□ 「みちしるべ」に対する考えなど： 調査項目9)～12)

以下のように多くのコメントが寄せられました。本来は調査番号(DBへの登録番号)や写真とともに掲載するのが望ましいのですが、編集の方法や紙面のサイズの制約からテキストのみの転載となりました。また、可能な限り、原文のままを心がけましたが、一部の文言などに変更があるかもしれません。これらの点についてはご容赦ください。いずれのコメントも、調査者の臨場感あふれる率直な意見や感想ですので、皆さんで、その感激を共有してください。文末にある番号は、同一「みちしるべ」の調査番号を示しています。

No	9) その「みちしるべ」の由来をご存知でしたら教えてください。各欄の番号は同一「みちしるべ」です
1	以前は百瀬川にかかる集落内の井川橋の橋詰に、明治二年建立の石灯籠の傍らにありました。女優の淡島千景さんの父親の屋敷ではなかったかと思うのですが、百瀬川の改修で、石灯籠とともに、現在地に移設されました。
2	移設の理由は分かりませんが、昭和30年頃の記憶では、マキノ西小学校のあたりにあったように思います。小間地物なのかどうかは、調べてみないと分かりません。(350)
7	白鬚神社の参道案内だと思ふ。北国海道(283)
8	谷汲は谷汲山華厳寺
9	江戸時代彦根へ年貢を納めるのに通った道で、約千石の荷がとおたので、千石道と名付けられたと言われる。現在、県道246、大鹿寺倉線となっています。
15	大津教育委員会の説明文(写真)あり(120, 272)
16	平清盛の寵愛を受けたとされる白拍子の妓王は故郷の水田が旱魃に悩まされていることから、清盛に願い出て、1173年、野州から琵琶湖野田浦にいたる3里の水路を作らせたとされる。この水路が「祇王井川」と名づけ、830年を経た今も水田を潤している。
17	江戸幕府と朝鮮国の友好のため、朝鮮通信使が1607年～1811年の間に12回来日した。その時に通った道を朝鮮人街道というが、その起点となる道標である。ここから中山道の鳥居本まで約40Kmのルートである。(234)
19	幼い子供の時、この右の道を通って老上は矢橋方面に道が通じ、今は鉄路で断たれているようですが、踏切があってやばせ方面に道がありました。さらに行くと、八幡神社があり、シイの実が多く落ちる社です。左に行くと、のじ方面に松並木(東海道の)が人気もすくなく続いていたのを思い出します(年齢が知れますね。私は江戸時代の人か?)。この付近は私の先祖代々出身の地で、なにかと因縁めいたものを感じます。(37, 147, 259)
24	湖北地方には約90の古くからの道標が確認されていると聞いています。この道標は、その中で最古の一つで江戸時代に設置されそうです。(323)
26	竹生島道の案内
29	この道標は、北国海道と竜華道が交差する点にあり、江戸時代には和邇宿が置かれたところであった。交差点中央には一里塚の樹木として榎が植えられ、天皇神社(西約500m)の神木でもあった。しかし榎の古木は昭和43年に切り倒され、かわって顕彰碑がたてられた。その後、地元有志によって、昭和50年に道標がたてられた。(96, 278, 320)
32	多賀大社詣出道として整備された。
33	伊勢から多賀社への参詣道で、道標では近江では最古の年号とされる立木神社境内の石柱(1860)より、53年も前に立てられている(1807)。
34	南無阿弥陀仏の名号より、仏教の普及と旅人の安全をはかった。
35	多分町営木工所製ではないか
37	大津への近道(時間短縮)として、の道標。むかしは姥が餅屋角にあった。寛政10年建立(1798)(19, 147, 259)
40	柏原宿より一里塚の跡地に建立(旧町建てたものが)
44	入り口の「みちしるべ」と同時に、参道に一丁毎に建てたものと考える。
45	平成18年地元が町の助成により「まちづくりほっとプラン」として、委員会がつくったもの。
46	山頂に霊山七寺の一つ、天台宗山岳寺院、松尾寺があった。その入り口に建てたもので、これより1丁毎に石柱が建てられている。本尊は聖観音菩薩で神護景雲三年 僧宣教による創建である。一時は50寺も立ったと伝えられている。飛行観音も祭られていて、戦時中は飛行機関係者のお参りも多かったとのこと。
47	平成十年三月に隣接する野洲小学校の正門が改築され、その近くが中山道の景観を思い起こさせるような造りに改修された。そこに新しく建てられた道標である。
49	横川太師道、西教寺道へのみちしるべで、古い道である
52	無動寺への登り口、坂本、下坂本界限の方が修行の一環として行脚される。坂本の坊さんも当然です。(169)
58	石山寺を配した歩道とみられる
59	石山寺を中心とした観光案内
62	蛭谷10-21坂本家の新築により道幅が広がり、坂本家の一角に移設されたため、未長く管理されると思いました。ご主人が大切に思っていますと言われていました。(256)
64	H19, 12, 1に、「伊勢みちをたどる」金田学区歩こう会のために造られた。何年か前まで、近くの田の中に、同じ石道標があったが、農地改良でなくなった。
71	伊勢神宮と多賀大社を結ぶバイパス
91	役場の人の弁「市が設置したものではなく、由来は不明とのこと。近藤翁とは北方領土を探検した近藤重蔵の墓所と示すもんだろう」(297, 346)
131	三宮は正源寺の住職圓海の長男。幕末から大正にかけて活躍した人物で、近くにある墓地には立派な墓碑がありに

	は、その事跡を記して顕彰している。(274)
138	観光を目的として、琵琶湖の湖岸道路沿いに、ところどころに設置されている。
143	江戸時代後期、比江村の役人が幕府に申し出て、設置許可を得た(案内板)。
151	近くの古老の弁:明治19年守山警察の設置とともに、ここに建立され、昭和35年、トラックがぶつかり、折れた(今、修復されている)。
154	建立者(酒造蔵)の銘柄「北国街道」にちなむか?
165	本物は市の資料館に保存されているとのこと。
225	中山道分間延絵図にこの道標が書かれている。
319	旧道にあったものを移転。聞くとよれば、福井方面(鯖街道)、大原・京都方面の分岐点。また大津・堅田方面へ通じる。盗難にあった上部を探して、京都左京区の石材店を訪ねたとのこと。
320	四差路の中心 型にあり、北に福井・北陸、南に京都・大原、東に今津、西に堅田・大津と分岐道路の要所にある。これこそ「みちるべ」があってよし。(29, 96, 278)
321	近江神宮への参道で、歩道はタイル化されており、常夜灯もあり「神宮」の型になっている。当「みちるべ」は国道の一角にあり、小さな公園化しており、ゆっくりお参りできるようにしている。
324	道標の横に來歴を記した銘版があり、これで道標のことがよく判るのはありがたい
325	ここまで表示するなら、略図もつけてほしかった
336	小浜と京都を結ぶ鯖街道の分岐点であるとともに、竹生嶋・宝厳寺へむかう西国三十三所観音霊場めぐりの巡礼道でもあったらしい。高島市指定の有形民俗文化財。
338	近年、御影石の囲み、台座が整備されたようだ。
340	「石敢當」は魔よけで、民間信仰を伴うもので、県下では珍しいとのこと。
344	「鴨御堂」とは、近くの慈恵寺のこと。旧国道161から、この寺に向かう間道と国道の分岐点にあったと思われる。
353	集落外れの根来坂峠の古道(鯖街道)の分岐点にあった。林道工事で折れたので、業者に修復させ、東小浜へ抜ける林道登り口に設置させた(平成2-3年頃)。
354	約30年前は、名田庄村(福井県)へ行く、川沿いの古道にあったが、峠にいく車道ができて、当時すでに古道は使われておらず、草に覆われていた。現在は新たな林道整備のため古道も不明確になっている。
355	小入谷～能家間の車道が完成するまで、雲洞谷方面から針畑地区(桑原など)への山越え道は盛んに利用されていた。200年くらい前には峠で相撲大会が開かれたとも伝えられています。峠に道標があってもおかしくはないのですが、現在は登山者や山仕事の人がしか通りません。
356	約50年前、この家の父上が安曇川支流の北川の川原で、裏向いた状態で発見し、文字が書かれていたので、持ち帰って保管している。
357	自宅の一部を朽木盆之家(資料館)として整備された時、かつてかつて鯖街道であった自宅前に、記念として設置されたもの。

No	10) その「みちるべ」について特に感じることや、お気づきになったことをお書きください。
1	昭和の初期に県道が開通するまでは、本道だったとかで、琵琶湖一周の自動車もこの道を通ったと聞いています。当時の道にかかっていた橋も朽ち果て、道路も途中で消えてしまっていますが、集落内の道は健在で、河川改修がなかったら、元の位置にあったと思います。
2	マキノ西浜の地先、通商「山崎」のマキノ工業団地の入り口にも同じ形の道標があり、たしか「北国道」「京道」と書いてあったのですが、もうありません。(350)
7	昭和30年代村の人たちは、白鬚神社のお祭りを楽しみにしていた。江若鉄道で祖母に連れて行ってもらった。参考図書に6基あるようなので、歩いてみたら面白いと思った。(283)
13	宗教的参拝を目的として建てられている。(119, 171)
16	みちるべはそれほど古いものではないよう。隣に並べて建てある碑のほうが古そうだが、文字がよくわからない。
18	一部の地元のものしか知らない。(144, 263)
20	昔の東海道の街道はもっとさびれた細い存在だったと思われる。確かにここに人々の往来があったと想像すると楽しい。(4, 148)
21	あまりに有名
22	近江八幡はみちるべが、楽しい。
23	有名というか、インターネットの情報にあまりにも多く揚げられている。(67)
29	京都より陸路、今津・敦賀方面へ行くには、平坦で最短の道であり、古来より交通量が多かった。今でも生活道路として交通量が多いが、不思議と交通事故のない交差点である。中央に顕彰碑と道標が居座っているため、車は徐行せざるを得ないからか?(96, 278, 320)
30	湖上を北上する北国海道の実質的起点と思う。東への道は昔の湖岸沿い(東海道、島の関付近には港の常夜灯あり)、北には阪本・堅田、東に石山・草津、南に逢坂関・京都、西に三井寺、湖岸に観音寺船溜と、交通の要衝であった。琵琶湖疏水は明治20年に頃できたので、本来の設置位置とは大分違うかもしれない。(103, 203)
32	高笠は栗東町林の善光寺をさすと思う。
33	御代参街道として東海道から多賀への起点となっている。
34	す山(栖山)は上野と油日の間にあった小字名であると、通りかかった近所の人に教わった。
35	もてなしの町(Hospitality)をキャッチフレーズにしている、旧甲賀町の設置
36	近くの坊袋にも同様の道標がある。近くの人に聞くと平成になってから作られたとの事。
38	芦浦観音への入り口案内標。矢橋で下船して芦浦経由中山道への案内でもあったと思われる。3本の道標が有る。

39	現在の穴村診療所が、昔、子供の病気の有名な病院だった。そのための「みちしるべ」であったと思われる。(5, 107)
40	昔、中山道を旅した人が、疲れた足を休めた場所か。また次の宿場までの距離を考えたことと思う。
47	新しいが、なかなか存在感のある道標だ。道標の後ろが野洲小学校、向かって右が正門である。
48	山手(西方向)に登り道をあがっていけば「仰木」、奥比叡ドライブウェイがある(比叡山山中)
50	距離の表示に丁が書いてあり、字体も古く、相当の古さは感じる
52	明治中ごろに建てられたもの。当時はケーブルもなかったように思われます。歩いて登られたと思います。(169)
53	観光案内です
55	自然歩道と観光神社仏閣・・・大津「Otsu」のマークあり
56	唐崎神社は琵琶湖湖岸にあり、袋地。お参りの後、どちらの方向かの表示がもしれません
57	大津市が設置。より場所が明確になった。明治時代にロシア皇帝の事件があった場所と思ひ出します。
58	瀬田川沿いに南下、石山寺に通ずる形式のよいところ
59	石山寺付近の名所旧跡他の案内板である。
70	歴史的に貴重な「みちしるべ」、ゆえ、早急に手当て、保存してほしい。所轄の役所を教えてください。連絡してほしい。
89	おそらく途中町の遷来(もどろき)神社を示すと思います。
90	地主神社への道標かも。
91	手の形で方向を示すのは現代的と思いましたが、その雛形は役場にある北国街道の道標にあるようです。また両者は形も同じで、よく似ています。(297, 346)
92	元は、街道の東側に位置する役場の玄関先(前庭)にあったとのこと。よって指の方向と合致する設置場所が理解できないのですが・・・(345)
106	この一所には道標が乱立。参詣 会記念ばかりである。これはいかがか？
127	設置者名とともに粋な文面あり。移設されていて、まさに文化財として健在である。
132	「小町の塔」とは、小野神社の境内にある石宝塔で、小野小町にちなむものかもしれない。鎌倉～室町初期のものと思われる。(276)
135	琵琶湖大橋ができるまでは、ここから向かいの木の浜(守山)までの渡しがあり、ずいぶん賑わっていたことであろう。
138	旧街道の里程標としては榎が植えられ、旅人の便(休憩目印、あとどのくらい、など)をはかった。
146	浄土真宗木部派本山への参拝者向けに、この近辺には錦織寺道標が多くある。(210)
147	旧東海道と矢橋港を結ぶのが「やばせ道」。近年まで矢橋港から大津や阪本への湖上交通があった。(19, 37, 259)
150	延享元年(1744年)の古い道標だが、ほとんど破損もなく、各面の状態は良好。一面はすこしくぼめて面を作ってあり、また各角に彫がいられている。美術的にも優美なものである。(262, 327)
152	故意か、事故か、上半分が折れてなくなっている。痛ましい状況。
161	真新しいことからつい最近設置されたことは、明らか。「高」(異体字)を除き、現代の字であるのに、里程を昔のようにしたのは不釣り合い。
163	このようなものは長持ちするものではないから、感心しない(プラスチック・鉄板製)。
165	元標なるものを見たのは今回が初めて。里程があることから「みちしるべ」として扱った。
169	よく見ると電柱の後ろに毘沙門天王の文字が認められる。何か確認したい。(52)
170	埋まっている部分に里程が「従是二丁」とあると思う。
173	このような東海自然歩道の道標は県内随所で見られる。あまり調べる気にならない(登山、ハイキングをしているので見飽きている)。
207	道路拡張工事に伴い正面が西向きから南向きが変わっている。脇にある背較べ地蔵は南向きから西向きに変わっている。
209	の意味 不明 (145)
215	近江の道標(民俗文化研究会)p180 207に宝暦十とあるが、確認できなかった。
216	写真の通り、真新しい。汚れも全くない。しかし、資料には載っておることからすると最近復刻再建したと思われる。寸法も異なる。資料に写真がないのが残念である。
217	設置年は見当たらないが古さや、江戸講中とあることから明治時代より前と考える。
218	南東方向に墳墓が見え、墓石から「住」が確定できた。半右I は土中にあり、おそらく「門」。
224	「大坂 *」の意味は何かわからない。
225	願主の()内は少し土を除いたら見えてきた。土中に埋もれた部分に里程もあるのでなかろうか。豊満神社までは、ここから約2kmである。
227	二十丁、三十丁のいずれかで、その位置から三十丁と思われる。(欠損部に関して)
237	隣の石灯籠と共に石垣上にコンクリートで固められていることから道路改修の時に一段上に移されたと思われる。位置は移動されていないと考えられる。設置年月はないが、古いことは伊吹山文化資料館でも話を聞くことができた。
242	柏原宿内の道標と兄弟ではないかという気がする。設置年月が同じだから...。裏面の地下部が見たい。(83)
243	高札風の由緒書がある。(80)
250	「たかわ」の「わ」が少し欠けて、「わ」と判断できず、たかわ、たかゆ等、3文字でたか の地名、社寺名等、近くにいた地元の人に尋ね、最終的に、詳しいといわれる古老を訪ね、タガワであるとわかった。三雲付近にある地名である。
256	本に牛尾山江二十九丁とあるが、写真の通り三十九丁である。 山科御坊へ二十一丁とあるが、写真通り一里である。 伏見船場江二里とあるが、舟場へ二里八丁である。 城之は城之介である。 三月ではなく二月である。 石山駅でなく石山寺駅である (62)
257	近江の道標(京都新聞社)P29に「川ぞい」とあるが写真を見ると「川ばた」としか読めない。寸法も異なる。
258	高さが本とちがう。10cm 差は大きい。写真は同じように見えるが...
260	添付写真に道標の説明文あり

265	「近江の道標」には「河瀬仰七」とあるが写真の通りどうみても「伊七」である。寸法もずいぶん違う。
266	「すぐ大津」と読んだのは、ちがうのではないかと思う。大津が「すぐ」とは思えない。が、他にそれらしき地名はない。「近江の道標」P74に「三之」とあるが写真は「立之」である。「建之」と同義で使ったのでは？ちなみにこの家の名字は「後藤」でした。
267	本には設置年が記されているが、見えなかった。再調査が必要。
269	「近江の道標」にある寸法とずいぶん異なる。再確認した。
270	公園風に整備されているが、植込が邪魔で裏側が見えない。まわり込むこともできない。助人は8/24に再調査(剪定バサミを持って)
275	近江の道標(京都新聞社)P121には、設置者名については書かれていない。また寸法も少々異なっている。(97)
278	交差点のどまんなかにある有名な道標である。(29, 96, 320)
280	近江の道標(京都新聞社)P123には寄進・設置者については書かれていない。また、大津江五里余の「余」も書かれていない。所在地も和邇今宿町とある。
281	隣に交通安全の碑(S56年7月の銘)が並び、地蔵とともに屋根がかけられているので、再建の感じがする。「大阪」のこざとへんであることにも留意が必要。(155)
282	狭い交差点のどまん中にある。地元の人には脇への移動を承知しなかったと、すぐ近くの人が云っていた。
283	すぐ脇の人が手伝ってくれた。感謝。(7)
284	設置年月日に「年」と「何」日かの2字がないのは珍しいと思う。(5)
286	笠の高さ約24cm、幅49.5cm、奥行49cm
292	志んかい村は新海町、ふかうし村は普光寺町であることは容易にわかる。
293	別に由来を刻んだ石碑あり。それによると慶応3年2月野村善七が建立寄進とある。(写真右端)
303	本に高さ182cmとあるが、本に載っている写真を見てもおかしい。
318	学区毎に建てられている
319	交通の要所にあり、「早く従前の通り建立してほしい」との事であった。全く同感である(調査者)。
320	古くは大木が繁っていた。碑は昭和43年「みちるべ」が昭和50年に建ち、大木はない。(29, 96, 278)
322	八幡神社の東北角に在る、なんの変哲も無い石の道標、だが長浜方向から来た旅人がどちらに？と迷う所だから、この位置に道標が在るのは実に理にあって有難い存在だ
323	曾根の道標で、竹生島への道順を教えられた旅人は、早崎港へ行くのに間違っ馬渡方向へ行くことはないと思うが、この道標には竹生島を示す文字が無い！これは早崎港からの人に長浜を教えているだけか(24)
324	集落の中の道が、旧北国街道であったことを知り、竹生詣での人達がこの道標に教えられ、北国街道からここで竹生道に岐れて行ったことだろうと思った
326	京都の骨董市に出品されていた山陰地方の道標
329	阿育王の墓は古い時代のものであり、今の道標よりもっと古い物があると思っていたが、見当たらなかった。
330	道と記した道標が多いのに、停車場線と表記した石碑は、道路が出来た記念に建てられたものと思われる。旅する人が対象の道ではなく、生活道路として地域の人達のために造られた道であることがうかがえる
341	鴨川右岸のNo342と同じ年代、字体
342	No342と同じ年代、字体
348	木村氏によれば、カタカナの道標は県下唯一とのこと。
353	(9)の続き：小浜への鯖街道(古道)には、曲がり道には2ヶ所、道標があり、集落に近い方が現在のもの。山の登り口にあった自然石(1m以上)は、車が横付けできるので、盗難にあった。
354	荒れ果てた古道に建っていたときは、哀愁を感じたが、集会所前に移されると、歴史の重みも半減してします。残念な思いにかられる。(保存のためには仕方がないかも)。西近江路以外に朽木に山越えの道標が多く残されていることが分かり、驚いている。
355	同じ峠にあった地蔵さんが台座を残して盗難にあっている。この道標も小サイズのため、盗難の危険があるので、公表は控えてください。
356	一時期、朽木郷土資料館に寄託されたが設置場所がなくなり、自宅で保管中。将来的には資料館の適切な場所で保管、展示してほしいと希望されている。
357	この道標が鯖街道の象徴的なものとして、ある雑誌の鯖街道記事の写真として使われた。

11) 他の人たちに紹介したい「みちるべ」があればお書きください。	
No	紙幅の都合上、写真や地図を掲載できませんので、【所在場所】をいれました。
18	このみちるべは朝鮮人街道の起点となる場所にあったもの。最近では散策される方が多いので元の位置にもどして皆さんにみていただきたい。また小学校(野洲小)の前の道にも最近、石造で中山道の標識が建てられたので近くを通らねたら、それもみていただきたい。(144, 263) 【野洲市行畑】
30	500m離れた路地に、関西のお笑い脚本家、花登こぼ先生生地の碑を見つけた。琵琶湖疏水の北国橋の山側の次の橋は鹿間橋で、そのたもとに旧鹿間町表示碑があった。(103, 203) 【大津市長等町】
32	日本真鍮祖「山上庚申道」 嘉永四年(1851)ペリーの二年前 【甲賀市土山町北土山】
33	鈴鹿峠の万人講灯ろう(常夜灯)があり、道しるべの役割を果たしていた。【甲賀市土山町北土山】
34	この碑は(大津歴史博物館館長の近所の本に出ていると、教わった。【甲賀市甲賀町上野1517】
134	円筒形の道標である。よって方向指示はなく、距離のみの案内である。堅田は浄土真宗の故地であり、とくに蓮如上人旧跡が多い。【大津市本堅田1丁目】
136	勾當内侍は新田義貞の妻。義貞の訃報を受けてこの地で入水した。一面にはその事情と歌が漢文で綴られている。

	【大津市今堅田二丁目】
161	資料館の内部に道標が展示されている。約1.5km北の”井口(いのくち)”という地区に合ったものといわれている。(No153参照)【高月町渡岸寺】
163	もう一本見たが、写真は撮っていない。【米原市柏原長沢】
173	本調査では木製鉄製も含めて対象としたが、特に木製は早く朽ちるので、意味がないとも思う。建築物とちがいで、文化財にはなりえない。【大津市滋賀里】
215	同じ寺に 296、298 があると思うのだが、わからなかった。【近江八幡市馬淵町円願寺】
238	すぐ隣に岐阜県と同様のものがある。写真を添付する。(76) 【米原市長久寺】
293	この一角は道標銀座といった所か。小さいのは調べていない。(8/24に調べた)【彦根市原町】
320	この「みちるべ」のように分岐点にはっきりと建っており、今までにない「みちるべ」とみる。要所に建てるべし。学区が公所に設置の申請をすべきである。また整備をすべきである。(29, 96, 278) 【大津市和邇中町】
321	当「近江神宮」の「みちるべ」を紹介したい。【大津市松山町】
322	古い街道を、そこに建つ道標の指示に従って歩くのは、「探す」楽しさを十分に堪能できる。次ぎのを見つけた満足感、達成感はそれまでの疲れを吹き飛ばしてくれる。【長浜市富田】
329	石塔集落の中心の十字路にあり、集落の名のいわれとなった石塔寺を案内する道標が、意外に新しいのは、石塔の存在そのものが比較的近年になって識られるようになったからか？【東近江市石塔】
353	(10)の続き：行き先に書かれている「叶」の文字の意味をしりたい。【高島市朽木小入谷】
355	サケビ峠には南桑原登山口から徒歩20 - 30分かかります。峠は雲洞谷、桑原、平良の三方向の分岐点となっています。【高島市朽木桑原】

No	12) 「みちるべ」全般について、何かお考えがあればお書きください。
2	マキノはスキー場や海津大崎等自然にめぐまれ早くから観光に力を入れてきましたので、案内用標識等、文字の判読できない古いものもありますが、ゆっくり調べてみたいと思います。調査標の余分があれば、送ってください。(350)
3	特に案内板を読んで、旅人の安全のため「みちるべ」として寄進された人たちの清心を感じる昨今である。(149, 261)
5	しばしば車で通る、比較的細い道ですが、存在を意識したのはこの調査のテーマを見てからで、車社会で価値観がきえても、先人の優しさがしのばれます。(39, 107)
21	有名なものしか調べられませんが、このような存在を尋ねることができ、自分自身、日常生活から違った昔事をしのぶことができました。
32	わずか100年前まで重要な道標であったが、1900年前後の鉄道以来、旅人が絶えた。
33	明治の鉄道開通までは徒歩の旅で、重宝されていたそうです。
35	旅人に暖かな町でありたい
41	この道「みちるべ」は建てる向きが間違っている。左右反対のことが書いている。左方向が番場で、右方向が柏原宿である。(241)
45	石柱の横に霊場松尾寺従是十二町
61	杉本正光さんは、現石山郵便局の先祖で、当時代、地元の実力者であつたらしい。現在の在住のかたも、杉本正光の名前で生活されているとのことでした。
318	交通の要所、道路の分岐点等に「みちるべ」がない。古からの石柱、コンクリートは柱、木柱の「みちるべ」が時折あるのみで、現在、新しく設置されたものは全く少ない。建てられた年月日の表示がほとんどなかった。(No318 - No321までの印象)
322	誰が何時建てたのか判らない道標が多いが、街道を旅して進むべき道を教えられた人の気持ちが、この調査でよく解った。そして、建てたひとの思いも理解できた。
324	古い道標をこのように保存されているのは珍しいのでは…。残すのであれば、このように残して欲しいものである。7 - ト三方を柵で囲い、道標の来歴を記した立派な銘盤造りで、昔の写真まで詰め込み、大切に保存されている